

三河の昆虫

No. 17 1976年12月

〒448 刈谷市井ヶ谷町
愛知教育大学昆虫研究室内
三河昆虫研究会 発行
第一プリント社 印刷
☎ ◀56▶ ㊟4468

東三河の食葉性コガネムシ (II)

— 逐に珍種オオヒラチャイコロガネを採集す —

松野更一・松野光恭

筆者等は本紙12・13号(1975年10月)で東三河の食葉性コガネムシ69種について報告したが、その後の調査で新しく5種を確認することができたので、ここに報告する。

これで当地方の食葉性コガネムシ類は74種になる。

なお、追加種を発表するにあたり日頃御指導をいただき大平仁夫博士、山崎隆弘氏、貴重な標本を恵与された伴憲隆氏、小林裕和氏、また標本の同定に労をおとり下さった野村鎮氏に心からお礼申し上げる。

コフキコガネ亜科 Melolonthinae

1) オオヒラチャイコロガネ

Sericania ohirai SAWADA (図, B)

日本ヶ塚山, 9.V. 1976,
本宮山, 6.VI. 1976. (伴氏採集) 12.VI. 1976.

本種は1954年5月16日に大平仁夫博士が三河本宮山で採集された1♂2♀の標本をタイプとして新種の記載がなされたものでその後、長野県から2頭の採集例しかない珍種である。

長期間、本種の生息や分布調査を行って来たが、何々得られず基産地での生息が危ぶまれていたが、今後の調査で確実に生息していることが確認された。特筆すべきは富山村の日本ヶ塚山で、基産地以外の遠隔地から得られたことは分布的に非常に興味深い。

これで本宮山から奥三河地方一帯に本種が分布する可能性が十分考えられる。

2) オオタケチャイコロガネ

Sericania ohtakei SAWADA

本宮山, 16.VI. 1976,

本種はナエドコチャイコロガネに外観が極めて類似しているが触角で区別できる。関東、中部、近畿地方に生息しており本属中比較的広い分布圏を持つ種類である。今度手持ちの標本を野村鎮氏に同定して頂いたところ上記以外の地域で岡崎市の六所山(岩月氏採集)と猿投山(伴氏採集)に生息していることが判明した。三河地方にも広く分布しているようである。

3) ルイスチャイコロガネ

Sericania lewisi ARROW

本宮山, 6.VI. 1976, (伴氏採集)

本種は一見したところツチャイコロガネに類似しているが、体面下が黒色で金属光沢があり区別できる。本州(中部以北の山地)に分布しており当地方では段戸山、茶白山からの分布が知られている。

スジコガネ亜科 Rutelinae

4) タスムラスジコガネ

Mimela takemurai SAWADA (図, C)

茶白山, 3.VIII. 1976, (小林氏採集)

本種はヒメスジコガネと同様不規則な皺を有するものと全然皺のない個体とがあり区別しにくい。本種は前、中脛節は普通銅緑色で中脛節には白毛が生えている。九州・四国には比較的多く生息しているが本州では少ない種である。当地方でも20年程前に段戸山で記録されて以来、一度も報告されていない。今年の8月に段戸山と茶白山へ野村鎮、小林裕和両氏に同行させて

頂く機会を得て2日間採集を共にした。その後採集された本種を小林氏が恵与下さった。珍しい種なので、ここに発表させて頂く。

ハナムグリ亜科 *Cetoniinae*

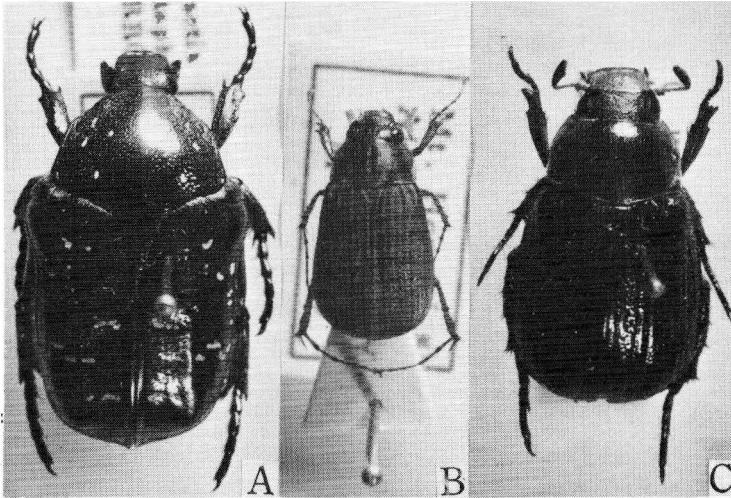
5) ムラサキツヤハナムグリ

Protaetia cataphracta ARROW (図, A)

豊橋市, 9. VI. 1976,

本種は図鑑や各地の文献によると栗の花や各

種の樹液に集まり、生息域は山地と低山地になっている。筆者等も山地および低山地を重点的に調査したが得られず、今度偶然に平地の樹液で採集することができた。聞くところによると本種は低山地から平地にかけて意外に多く生息しているとのことである。愛知県下では未記録のようであるが、平地は採集の盲点になっており、今後各地で注意して調査すれば次第に採集されるものと思う。



C タケムラスジコガネ (茶臼山)
 B オオヒラチャイロコガネ (本宮山)
 A ムラサキツヤハナムグリ (豊橋市)

【参 考 文 献】

- (1) 神谷一男 (1955) 奥三河の昆虫相, 北設山岳および鳳来寺山県立公園一帯の自然科学: 33~70, 愛知県商工部通商観光課。
- (2) 小林裕和 (1974) 扉温泉のピロウドコガネ類(1) *New Insect* 18巻, 2号 (別刷): 1~18。
- (3) 佐藤正孝 (1976) 茶臼山・面ノ木峠一帯の甲虫相, 茶臼山高原道路建設予定地域の自然環境調査報告書, (別刷): 155~171。
- (4) 沢田玄正 (1960) *Sericania* 属コガネムシの1新種, 東京農学集報, 6(1): 9~12。
- (5) 穂積俊文 (1958) 東海甲虫誌 (第6報) 食葉性コガネムシ類, 佳香蝶, 10(34): 1~14。
- (6) (1974) 東海甲虫誌 (第20報) 今までのまとめ, 追加, 訂正(その1), 佳香蝶, 26(100): 105~116。
- (7) 野村 鎮 (1976) 日本産ピロウドコガネ族について(その2), *Toho-Gakuhō*, No.26, (別刷): 205。

岡崎市に産する3種の昆虫

大 平 仁 夫

1. ギフチョウ5月に採集する

岡崎周辺に発生するギフチョウは、4月上旬頃で、中旬になると個体数が非常に少なくなる。私は、1976年5月3日に岡崎市岩中町で採集された1雌個体(写真)を調べることができた。

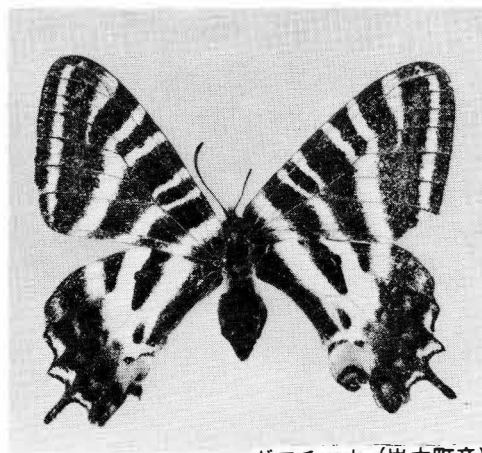
これは、この地方から記録のある最もおそい発生と思われるので、ここに記録しておく。なお、採集者は佐野鎮氏である。

2. マツムシモドキの産地

マツムシモドキは、北隆館の原色昆虫大図館によると、本州でも岐阜以西に産することになっているが、私は岡崎市岡町の山林で本種を数個体採集した。その他、藤川町の山林でも1976年10月上旬頃に得ている。本種は愛知県から未知の種と思われるのでここに記録する。岡崎周辺の山林では、9月下旬から10月にかけてかなり広い範囲に発生しているものと思われる。

3. アオマツムシの分布

アオマツムシは、最近まで岡崎周辺にいたことが知られていなかったが、本年になってからあちこちで鳴き声が聞かれるようになった。岩津地方では3年ほど前から鳴いていたそうである。現在分布を確認している地域は、岡崎市街地一帯、岩津町、藤川町、山中町で東限はよくわからないが、本宿町にもいる。また、幸田町にも一部の地域にみられるということである。本種がどうしてもこのように急速に分布を拡げてきたのか大変興味のあることである。皆様の地方での分布について注意していただきたいと思う。



ギフチヨウ (岩中町産)

県天然記念物ヒメタイコウチ
を岡崎市野鳥の森で採集

浅岡孝知

岡崎市大西町広表の野鳥の森で、わき水の水たまりの落ち葉からはい出した本種を1頭採集したので報告する。

本種は生息が限定しており愛知県から兵庫県にかけてとなっている。同市内では、中日新聞5月14日付岡崎市米河町で発見報告されている記事がみられるが、分布的に他にも生息地が考えられる。

採集日は1976年11月2日である。

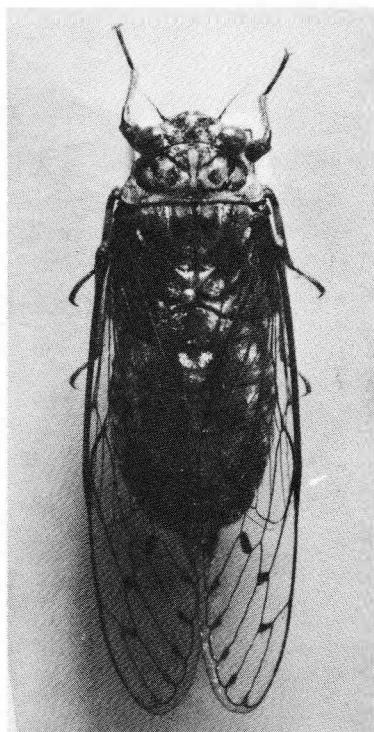
段戸山で

エゾハルゼミを採集する

松野更一

1976年6月27日に大平仁夫博士と段戸山裏谷の原生林で夜間採集を行った。その際燈火に飛来したエゾハルゼミを1頭採集したので、ここに報告する。

本種は日本全土に産し、本州中部以南では山地帯に見られる。成虫は6月頃から出現し、ミョーキン、ミョーキン、ケ・ケ・ケ……と独得の声で鳴き7月には姿を消す。



エゾハルゼミ (段戸山産)

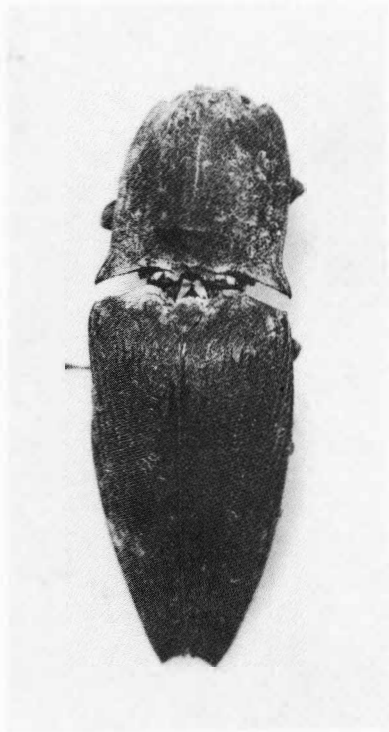
当地方では段戸山、面ノ木峠など僅かに残っているブナの原生林で細々と生息している希少種である。今後開発が進み、これ以上原生林が少なくなれば絶滅する恐れのある種類と思われる。

(〒440 豊橋市花田町斎藤74)

Paracalais mortuus (J. Thomson, 1856)

というコメツキムシについて
大平仁夫

岐阜県岐南町八剣におられる飯田逸博氏が、1976年7月12日に、名古屋市中区古渡町で燈火に飛来していた大型のウバタマコメツキ(図)を採集され、私の所に生きたまま送ってこられた。これは、図示したような体長40mmの雄個体で、日本から全く記録のない種なので色々調べた結果、この種はボルネオから知られている種であることがわかった。おそらく木材について入ってきたものと思われるが、飯田氏のお手紙によると、この他にも3頭採集されている由であるから、いくら検疫の目をのがれて入ったものにしても一寸異状ではないかと思われる。



この種は、その後シャーレの中で飼育を続けた所、11月27日頃に死亡した。日本のウバタマコメツキは、成虫で越冬するので、これを含めるとかなり長生きであるが、活動してこのように長生きの例は知らない。寒くならなかったらもっと長生きをしたのかも知れない。この種はボルネオ島だけに分布する熱帯性の種なので日本では冬は越せないものと思われる。それにしても、このような大型の種が何匹も入ってくるのは、検疫の不備もあるだろうが、何もかも大量に輸入して消費している実態が、こんな所にも現われていることを示しているのだろう。

「マツノマダラカミキリ」 寸感 鈴木友之

近年豊橋市東部一帯では枯死する松が激増しその防止策が講じられているが著効なく、昨年からの最終手段ともいわれる、農薬の空中散布が行われています。マツノザイセンチュウの運び屋マツノマダカラカミキリは、松枯れの主犯として林業関係者からは目の敵とされ、嫌われての空散ではあるが、その陰で犠牲となる他の昆虫類の余りにも多いことは、虫に親しむ者にとっては悲しいことです。空散の是非論は別としても、他に有効な方法はないものだろうか。枯損木も伐倒したままの未処理木が各所で見られるのはどうかと思います。それらの未処理木を若干拾集し、家で成虫の羽化脱出までの観察記録から、脱出時期を表にしました。嫌われ者のマツノマダラカミキリも、飼育観察からは憂らしきさえ覚える昨今です。

